

序

2015年4月に「腎臓内科医，腎臓内科研修医のための腎炎・ネフローゼ症候群の实地診療マニュアル」を出版した。同書は臨床現場でお役に立ったようで4刷と版を重ねて，好評であったと思われる。これは，同書が臨床実地の立場につき，意見の相違のある点についても，著者らの明確な立場，実際に記載したことも，反映していたためかと思われる。

しかし，初版からすでに3年経過し，この間の腎臓内科臨床治療の進歩（リツキサン[®]，セルセプト[®]などの上市）もみられる。また，あいまいな記述も修正を迫られた。なによりも，2017年に日本腎臓学会（「厚生労働省難治性腎疾患に関する調査研究班」）より「エビデンスに基づくネフローゼ症候群診療ガイドライン2017」が出版され，本書もそれに基づき改訂をせざるをえなかった。同「ガイドライン2017」は腎臓学会が総力をあげて作成し，諸エビデンスと諸意見を集約したものであり，非常に有益・有用なものである。しかし，異なる諸エビデンス，異なる諸意見をも医科学的に集約した「ガイドライン」であり，同書ではコンセンサスの得られていない点については明瞭な記載が不可能であるという限界点も併せ持っているように思われる。そのため，現場臨床で，目の前の患者さんを実地に診療する際に，明瞭かつ具体的な指針，ひらたくいえば，具体的に「最初の一手」，「次の一手」，「さらに次の一手」，「併せて考える一手」が，明瞭になりきれない限界もあり得るかと思われる。

本書では，患者さんを目の前で診察する際の，現場臨床での診察，検査，説明（第3章「患者・家族説明用」），治療方針を具体的に示した。また，処方薬については，併用薬を具体的に記載した。すぐ役立つよう，処方薬もあえて商品名[®]で記載した。「ガイドラ

イン 2017」の治療指針，フローチャートも実践的に役立つように，著者らの考えにもとづき，より実践的に改変した。30 数年の腎臓内科臨床の経験と知識をもつ医師（石村，阪口），ならびに，現在腎臓内科臨床現場で日々診療し，研修医の指導をしている若手中堅医師（仲谷）の経験，知識を臨床現場に実践的に役立つよう，具体的に記載した。

腎臓内科が内科専門診療の一分野として確立してまだそう長くない。また，日本からの新規治療が発表されているものの，なかなか国際的に受け入れられてないものもある（IgA 腎症の「扁摘パルス」，難治性ネフローゼ症候群への LDL アフェレシス，RPGN への血漿交換など）。

本書が，日本の腎臓内科の実臨床の進展において，腎臓内科診療の確立発展の一石となれば，著者らの望外の喜びであり，そのような熱意をもって本書を執筆した。

2018 年 3 月 大阪にて
石村栄治，仲谷慎也，阪口勝彦